

里川の利用や里川に対する愛着度の実態に関する研究

—里川集落の空間的構造及び人と河川との関わり方 その3—

正会員 ○岩田 和哉* 中西 章敦**
同 佐藤 誠治*** 小林 祐司****里川 集落 河川環境
河川整備 住民意識

1. 研究の背景と目的

原生的な自然に加え二次的自然環境の保全を行うことは、生物多様性の保全や、人と自然との共生を確立する上で重要な事である。しかし、これらを考慮することなく、開発を進め、原生的な自然や二次的自然環境が破壊されてきた。近年になり、この緊急な課題に取り組むため、環境省と国連大学高等研究所は SATOYAMA イニシアティブを提唱しており、これにより、現在「里地・里山」が注目されている。さらには、地域の河川を「里地・里山」を拡張した「里川」という概念で古来より親しまれてきた河川環境を守り、再生しようという動きが出てきている。そこで本稿では、「里川」の定義を明確化する基礎研究として、大分県竹田市門田長小野集落及び隣接する大津留集落を対象とし、アンケート調査を行うことで両集落の住民と河川との関わり方や意識などの実態について明らかにすることを目的とする。

2. アンケート概要

2-1. 対象集落

対象集落は大分県竹田市門田を流れる緒方川に隣接する長小野・大津留集落である(図-1)

2-2. アンケート項目の設定

- 【質問1】: 記入者自身の属性
- 【質問2】: 河川内の生物について
- 【質問3】: 住民の河川に対する思いや意識について
- 【質問4】: 住民の河川利用について
- 【質問5】: 河川環境や整備の要望について
- 【質問6】: 河川の維持管理について

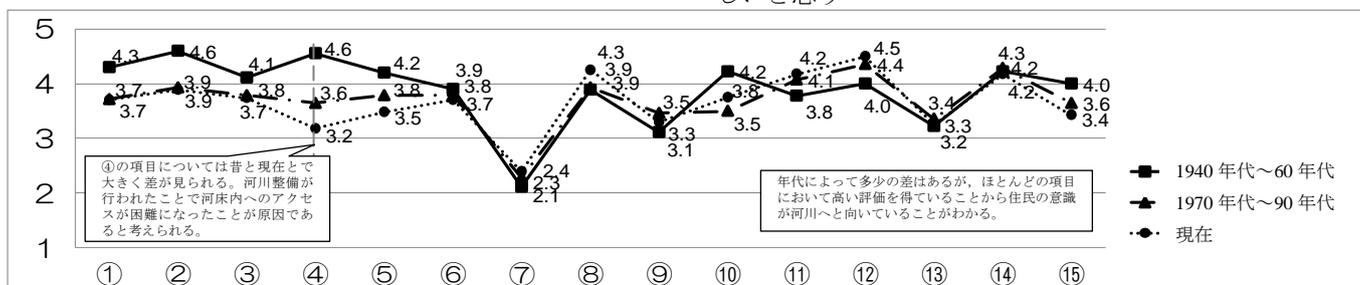


図-2 【質問3】年代別平均評価指数(長小野)

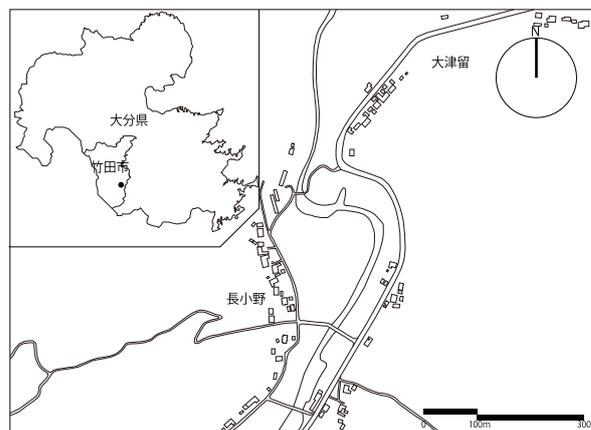


図-1 長小野・大津留集落

表-1 アンケート回収状況

集落名	長小野	大津留
河川名	緒方川(大野川支川)	
配布日・回収日	H24. 1/27・1/29	H24. 1/20~25・1/29
配布・回収(部)	32・29	34・14
回収率(%)	90.6	41.2

2-3. 結果と考察

(1)【質問3】質問事項

①お気に入りの場所がある②お気に入りの風景がある③川に「愛着がある」④川に行きやすいと感じる⑤川は「生活に欠かせない存在だ」と思ったことがある⑥川があつてよかったと思ったことがある⑦川がない方がよかったと思ったことがある⑧生態系を守りたいと思っている⑨川の水は美味しいと感じたことがある⑩川での思い出がある⑪集落に隣接する川は「里川」だと思う⑫川が怖いと思ったことがある⑬川が自分にとって大切だと思ったことがある⑭川の水が美しいと思う⑮河川環境が美しいと思う

A study about use of the Satogawa and the actual conditions of attachment to the Satogawa.- Spatial structure of the Satogawa village and relationship between river and human life, Part 3-

IWATA Kazuya, NAKANISHI Akinobu,
SATO Seiji, KOBAYASHI Yuji

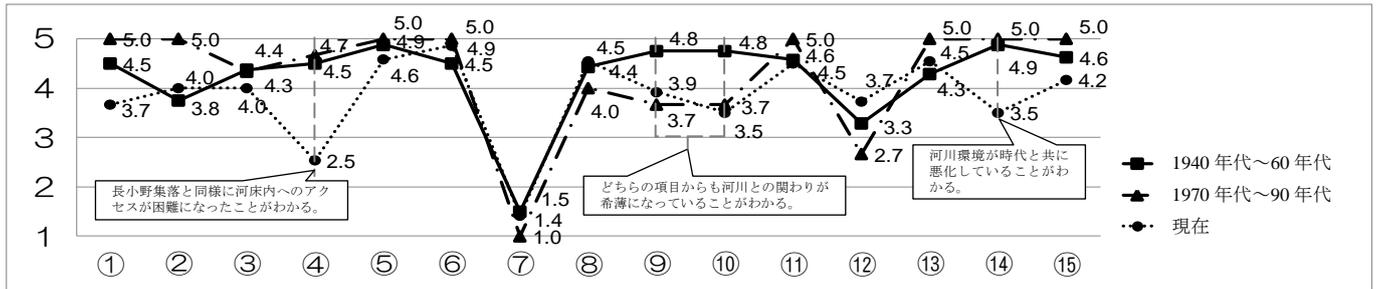


図-3 【質問3】年代別平均評価指数 (大津留)

【質問3】回答の選択肢と評価

- はい・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
- どちらかといえば はい・・・・・・ 4
- どちらでもない・・・・・・・・・・ 3
- どちらかといえば いいえ・・・・ 2
- いいえ・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

両集落共に⑦以外の項目については高い評価を得ており、このことから住民の意識が河川へと向いていることが分かる。また、両集落共に昔と現在とで最も大きく差が見られた項目は④であった。昔は評価値が高かったが、現在は評価値が大きく下がっている(図-2, 3)。これは河川整備が行われたことや人が寄り付かなくなり護岸が草木で溢れ、荒れていることで河床内へのアクセスが困難になったことが原因であると考えられる。

(2) 【質問4】質問事項

- ①食物を洗う②衣類を洗う③身体を洗う④飲み水にする⑤川へ生活排水を流す⑥防火用水にする⑦祭り・行事・風習で使う⑧農業用水として利用している⑨水利組合に加盟している⑩河川愛護団体に加盟している⑪散歩や休憩をする⑫生き物や植物を観察する⑬川の風景を眺める⑭魚以外の生き物をとる⑮魚をとる⑯川で遊ぶ

【質問4】回答の選択肢・・・・・・・・はい・いいえ

両集落共に、現在の主な利用用途は防火・農業用水としての利用、風景を眺める等の川に対して間接的な利用であった。日常的な生活用水としての利用は、現在ではほとんどなくなり、川の中で遊ぶ等の住民の動的な利用もなくなっている。昔は川魚が人々にとって貴重な蛋白源であり、川の空間は子供たちの遊びの場であったが、現在ではほとんどなくなった。これは、護岸整備により川の生態系が変化したことにより川魚が減ったことや、河川プールの建設により子供たちの新しい遊び場ができたこと等が原因であると考えられる。そのことから、人の河床内での活動は、時代と共に減少傾向であることがわかった(図-4, 5)。

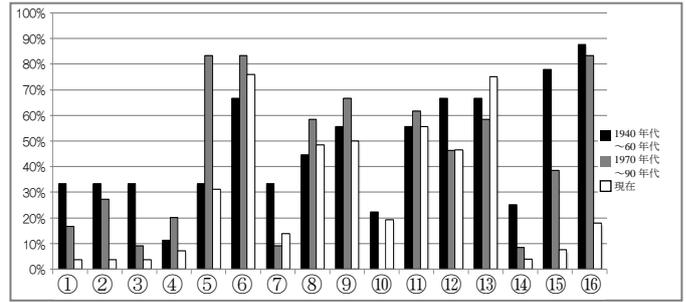


図-4 【はい】と答えた人の年代別の割合(長小野)

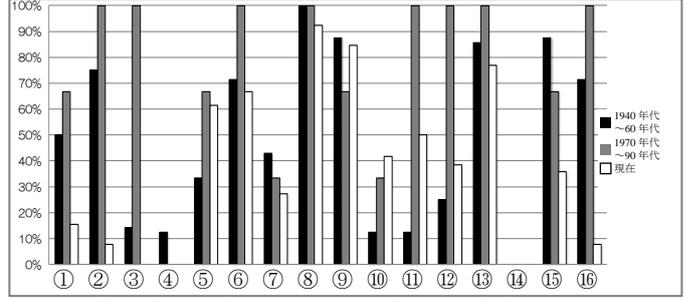


図-5 【はい】と答えた人の年代別の割合(大津留)

4. 総括

「現在と昔の河川利用」を比較することで、子供たちの遊び方の変化や河川利用の変化を把握することができた。昔は、人々の生活に河川は密接に関わっていたが、現在は間接的な関わり方のみであることがわかった。さらに、安全面を確保するため護岸整備を行った結果、河床付近へのアクセスが困難になり、人と河川の関係が希薄になっていることが分かり、今後の河川整備のあり方を再度見直すべきだと認識した。今後の課題としては、他地域における河川との関わり方を調査した上で、比較することが必要であると考えられる。

【参考文献】

- 1)古庄香織, 御手洗朋代, 岩田和哉, 中西章敏, 佐藤誠治, 小林祐司, 姫野由香: 里川集落の空間的構造及び人と河川との関わり方 その1, 日本建築学会九州支部研究報告, 2012年3月第51・3号計画系 pp385-388
- 2)御手洗朋代, 古庄香織, 岩田和哉, 中西章敏, 佐藤誠治, 小林祐司, 姫野由香: 里川集落の空間的構造及び人と河川との関わり方 その2, 日本建築学会九州支部研究報告, 2012年3月第51・3号計画系 pp389-392
- 3) 「SATOYAMA イニシアティブ」, 環境省, <http://satoyama-initiative.org/jp>

*大分大学大学院工学研究科博士前期課程
 **大分大学大学院工学研究科博士後期課程
 ***大分大学工学部福祉環境工学科・教授 工学博士
 ****大分大学工学部福祉環境工学科・准教授 博士(工学)

*Graduate Student, Oita Univ.
 ** Graduate Student Doctor's Course, Oita Univ.
 ***Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng
 **** Associate Professor, Dept. of Architecture, Faculty of Eng, Oita Univ., Dr.Eng